

## I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は奥羽山脈の中央に位置し、学区内は標高 240 m以上の高地にある山間部であり、和賀川と数本の支流沿いに 40 余りの集落がほぼ放射線状に点在している。その多くの集落は土砂災害の危険区域又はその付近である。また、人口減少と高齢化が急速に進んでいるため、生徒が地域の一員として果たす役割も大きくなっている。

このような地域であることから、学区内にある小中高の異校種間が連携し、地域で予想される様々な自然災害について、発達段階に応じた基礎的・基本的事項を理解し、地域の自然環境や安全について意識の向上を図らなければならない。

また、災害時における危険を認識し、日常的な備えを行うと共に、状況に応じて的確な判断の下に、自らの安全を確保できる生徒を育成しなければならない。

そこで、地域住民や行政機関等の関係機関の協力を得ながら「小中合同による防災マップの作成」「中高連携避難所運営学習会」の防災教育に取り組むこととする。

## II 取組の概要

### (1) 学区内防災マップ作成

#### ア ねらい

生徒の居住付近や通学路を中心に学区内の危険区域に指定されている箇所等を地域の人から過去の災害等の話を聞きながら現地で見聞することにより、避難場所や避難経路を確認し、自然災害発生時に安全な行動をとれるようにする。

#### イ 活動内容

##### (ア) 小中合同地区長会議

7月18日、湯田小学校において、小・中学校PTA地区役員に出席していただき、防災マップ作成の趣旨とその方法を説明した。夏季休業中に小学校の地区子供会を単位に、小中学生が共に活動し作成することを依頼した。

##### (イ) 防災マップの作成（7月28日～8月11日）

湯田小学校の地区子供会を単位に、小学生、中学生、保護者、地域の方々が参加し、危険区域に指定されている箇所を現地で確認しながら、過去の災害時の様子を聞いた。その後、ハザードマップの上に航空写真を重ねた地図に生徒の自宅や避

難所、過去の災害箇所、感想等を記入し、避難経路の確認等を行った。

##### (ウ) 展示（10月27日）

銀河ホールで行われる文化祭において、作成した防災マップを写真に撮りA3版のサイズにしたものを展示し、広く保護者や地域の方々に活動の成果を披露した。自宅付近の状況を確認する参観者が多く、関心の高さが伺われた。

##### ウ 活動の様子

マップ作成にあたり生徒は、地域の方の案内で普段は樹木に覆われ普段は見ることのない砂防ダムを見て防災に関する見識を深めていたほか、過去の災害発生時の様子に高い関心を持っていた。また、自宅付近が危険区域であることを初めて知り、認識を高めた生徒もいた。

マップ作成の実際では、中学生が小学生を支援しながらリーダーシップをとって作成することができた。



【防災マップを作成している様子】



【作成した防災マップ】

## (2) 避難カードの作成

### ア ねらい

登下校時等に災害が発生した際に家族と別の場所に避難することになったり、怪我等で会話ができなくなったりした場合を想定して、登下校時に「避難カード」を生徒手帳に入れ、携帯することにした。

#### <避難カード>

名前： \_\_\_\_\_  
生年月日：平成 年 月 日  
血液型： \_\_\_\_\_ 型  
住所：西和賀町  
電話番号： 0197 ( )  
避難場所：  
湯田中学校 0197 (82) 3105

#### 家族の携帯番号

名前 (関係)	電話番号
( )	
( )	

病気・アレルギー等  
かかりつけの病院

## (3) 避難所運営学習会 (10月9日)

### ア ねらい

西和賀高校と連携を図り、災害時の自助・共助の基本行動について確認を行い、将来、地域の担い手となる中高校生に避難所運営の実際を理解させ、防災に対する意識を高める。

### イ 活動内容

(ア) 県総合防災室防災担当職員を招いて、全校生徒40名、教職員12名、町内在住の西和賀高等学校8名が参加し、避難所運営ゲーム“HUG”を実施した。

(イ) 8グループに分かれ、各グループに1名高校生が入った。読み手は教職員が務めた。

(ウ) 生徒の感想から (抜粋)

・学習会を通してパニックになってしまいました。たくさんの方々が一斉に迫ってくると考えるだけでも頭の中がいっぱいになって

しまうので、どれだけ冷静に行動できるかが大切だと感じました。

・今日の学習会を通して、人を受け入れる側になったら、本当に間に合わないことが分かりました。本当に自然災害が起こった場合は、もっとパニックになって、自分も避難者の一人として不平を言うと思うけれど、冷静に判断して落ち着いて行動できるようにしていきたいです。

・実際に避難所生活になったら、避難所でみんな大変な思いをしているのでお年寄りや病気を持っている人のサポートをしていきたいと思いました。

・実際に避難所を運営するときは、自分から行動したいです。

・避難所の運営がどんなに大変かということが分かりました。これからもこのような学習会に積極的に参加していきたいし、避難所に避難することがあったら進んで手伝ってきたいです。

### (エ) 生徒の意識調査から

「避難所ではどのような立場で行動しますか」という問いに対して、積極的にボランティア活動を行いたいという生徒は26名と増減がなかった。しかし、「避難所では、どんな問題が起こるか」という問いに対して事業後には様々なトラブルの記述をした生徒が増え、避難所の運営が大変であることを理解した上で、ボランティアを行いたいという意識の変容が推察される。

## (4) 湯田小・中学校区安全防災マップの作成

日常生活での危険箇所や自然災害発生時の避難所を明示した地図を作成し、学区内の全家庭に配付し地域の防災意識を高めるとともに、災害時に活用してもらう。



【避難所運営学習会の様子】

### Ⅲ 取組の成果と課題

#### (1) 成果

ア 自らの命を守ることを第一に考えながら、自助・共助の気持ちを持って活動することの意義を深めることができた。

イ 地域の協力を得ながら小学生と地区単位で活動したことにより、中学生として、地域の担い手となることの意識を高めることができた。

ウ 防災マップの作成を行ったことによって生徒が直接危険区域を知るだけでなく、マップを作成する際に自宅から危険区域を通らず避難所への経路を確認することができた。

エ 文化祭での展示により地域の方々に対し、防災に関する意識啓発を図ることができた。

オ 教職員は生徒や地域の実態を把握でき、防災教育に対する意識が高まった。また、「本校は防災教育を計画的に進めているか」という教職員対象の問いの結果は、次のとおりであった

事前	「ほぼできている」	100.0%
事後	「できている」	54.5%
	「ほぼできている」	45.5%

カ 生徒の意識調査からは次の3点があげられる。

(ア)「ハザードマップを見たことはあるか」という問いに見たことがあると回答した生徒は、活動前は22人だったのに対し、活動後は32人に増えた。

(イ)「避難場所を知っているか」という問いに知っていると回答した生徒は、活動前は26人だったのに対し、活動後は32人に増えた。

(ウ)「自分の住んでいる危険箇所を知っているか」という問いに知っており実際に見たことがあると回答した生徒は、活動前は16人だったのに対し、活動後は23人に増えた。また、知らないと回答した生徒は11人から5人に減少した。

#### (2) 課題

ア 単年度の実践であり、保護者や地域の方々には防災意識の格差があることは否めない。学校教育の中で継続的に子供たちの意識の高揚を図っていく必要がある。

イ 今後、小・中・高等学校が連携し、どのような活動を展開していくか検討しなければならない。

ウ 行政機関と連携を図り、地域の防災活動に中学生が積極的に参加できるようにする必要がある。

#### 【資料 活動の様子の写真】



【危険地域を確認している様子】



【地域の方から危険箇所の説明を受けている様子】



【地域の方から過去の災害の話をしている様子】



【小学生にひなんサポートカードの書き方を教えている様子】

## 避難所運営学習会 西和賀高校とジョイントで開催

10月9日（火）、西和賀高校と連携し「岩手の復興教育（内陸）事業」の一環として、避難所運営学習会を行いました。岩手県総務部総合防災室主任の塚本清孝さんを講師としてお招きし、本校生徒1～3年生が8つの班に分かれ、そこへ西和賀高校の生徒8名がそれぞれ分かれて入る形で進めました。

この学習は、災害時の避難所運営を疑似体験するもので、読み手が読んだカードを、避難所として設定された平面図の上に配置していくものです。今回は、大規模な地震により学校の体育館に避難してくる人たちを、生徒達が受け入れる想定で行われました。

読み手である先生方が、次々と読み上げるカードになかなか素早く対応できず、生徒達は全員大慌て。実際の避難所では、想像を遙かに超えた大混乱が起こることを体験できた様子でした。

参加した生徒達からは、「私たちは東日本大震災を体験しているが、実際に避難した経験はない。今回の学習では、避難所運営がこんなに大変なんだと気づくことができて良かった。」「初めての体験で焦る部分が多かったけど、対応の仕方が分かって良かったので、実際に災害が起こったときには役立てたい。」などの感想が聞かれました。

